動機論序説 (1).〔第四回〕

佐野健治

第二・三部（印刷稿）に見える ラスコーリニコフの犯行の動機

2-1 第二・三部に見られるラスコーリニコフの生活と意見から，この文の主題にとって検討の必要が比較的大きいと思われる諸点を，テキストの進行に沿って，拾い上げたい。犯行後のラスコーリニコフは，呼び出し，盗品の隠匿（または廃棄），情報収集，現場の再訪，ルージンの評価をめぐって妹ドゥーニャとの論争，マルメラードフ死亡後のソーニャとの出会い，現場再訪，ポルフィーリー・ペトローヴィチ訪問等々を経験するが，これらの中から，犯行後の行動と思考であれ，犯行の動機と比較的に直接結びつけることのできることがらを，逐次取り出す。

犯行の翌日，犯行とは関係のない用事で警察に呼び出されたラスコーリニコフは，そこで経験した肉体と精神の緊張によって，孤立していく。この孤立は，彼がこれまでに知っていた彼の任意の孤立とは全く異なり，強制的に彼を唖と耳聾の国へ連れ去ろうとする。このことの責めの意識は，日を追って重くなるが，とりわけ彼が自ら情報の収集のために接近した予審判事ポルフィーリー・ペトローヴィチによって彼の理論と彼の実践との矛盾を衝かれて，理論的に自己を支えきれないと痛感させられて以来深刻になる。

[II-1]

2-2 犯行後自室に帰ったラスコーリニコフは，昏睡に陥ったかと思うと恐怖

に駆られて飛び起きるということを反復する。二時過ぎに飛び起きた彼は……突然，老婆の長持ちからひったくってきた財布も品物も，まだポケットに突っこんだままなのを想い出した。ポケットから出して隠すことすら考えなかったのだ。

ラスコーリニコフは，盗んだ金品の利用ということを考えたことがないようにテキストに見えるが，金品を隠す必要ということには疑いを持たないようだ。また彼は「品物のことは計算に入れていなかった。ただ金があるだろうと，そればかりを考えていたので，あらかじめ隠す場所など用意しておかなかった」。

最初の関門は，債務取り立ての請求で区の警察に呼出されたことに始まる。犯行と直接関係のない呼出しは，ラスコーリニコフの中に当然，混乱と恐怖を惹き起こす。これに対する彼の反応は，a.「ああ，神様，もう一刻も早く片付きますように！」 いきなり，ひざまずいて祈ろうとしかけたが，そのとたんに，思わず笑ってしまった。b.「破滅するなら破滅するがいい。どうでもいいよ！」 c.「こんなことはみな条件的なことだ，みな相対的なことだ，それこそただの形式に過ぎない（これは大きなウェイトをもつ近代的問題である）」。d.「とにかく，一刻も早く片付いてくれ。……入ったら，ひざまずいて，何もかも話してしまおう……」というように，粘りとかがんばりの必要を意識しない。その間，恐怖と嫌悪と絶望，そして自分の滑稽な動作に対する発作的な笑いとを反復する。そして「つまり怖いのだ」と自認する。

警察署の用件は，主婦からの債務取り立ての請求に形式的に支払延期の事務的手続きに応じれば事足りることが分った時，彼は狂喜する。この点で彼は，俗物と呼ぶべきかどうかは別として，普通人の一人に過ぎない。とても超人ではない。ただ，彼は喜びの状態がわずかの間続いたかと思うと，すぐまた彼にとっての常態である暗鬱に戻るから，その点はやはり普通人とは言えないかも知れない。しかし人間的ビヘーヴィアとしては，特殊ではないことに注目しよう。

彼が経験した恐怖→狂喜→沈静という精神状態の循環の特徴を取り出しておく。犯行の容疑で呼び出されたのではないことを知った時，とドストエフスキーは書いている，a. ラスコーリニコフは「自己保存の勝利と，のしかかる危機からの解放——それだけが，いまこの瞬間，彼の全存在を満たしてしまい，彼はもはや予見もしなければ分析もせず，未来の予測や推量もせず，疑惑も疑問も感じなかった。それは完全な，直接的な，純粋に動物的な歓びの一瞬だった」。b. 突然，何かとてつもなく気持のよい話をしたくなって，問わず語りに，事務官の制止も構わずに身の上話を始める。ラスコーリニコフの，身体(からだ)が，一種のこびを売りたくなったのだ。c. そこへイリヤ・ペトローヴィチ火薬中尉が咆号，部屋一杯に稲妻が光り，雷鳴がとどろき，天の怒りを表わす。d. 突然，ラスコーリニコフは反転，「……自分のことを誰がどう思おうと，一切構いはしないという，そんな気持に捉えられた。この変化はほんの一瞬間に，とっさの間に，生じた」。e. ラスコーリニコフは疑う，「一体，(b.) におけるような感情がどこから涌き出してきたのだろう」。「親友たちがここにいたとしても，彼らに語りかけるべき人間らしい言葉など，ただのひとことも自分の中に見出すことはできない。それほど彼の心は不意にうつろになってしまった」。苦しく果てしのない孤独と疎隔との暗澹たる感覚を，彼は突然あざやかに自覚した。f. しかし，彼の心をかくも唐突に一変させたのは，中尉の前で行なった心情吐露の下劣さではない。g. 彼には「何かこれまで自分が全く知らなかったことが生じつつあった。それは……どのような種類の話であれ，……たとえ相手が血を分けた兄弟姉妹であったにしても，もはや生涯のいかなる場合にも，自分には話しかける理由がまったくないと，はっきりと感じた。このような奇怪にして恐ろしい感覚を，彼はこの瞬間にいたるまで，ただの一度も味わったことがなかった。h. 何よりも苦しいのは——それが，意識や観念であるよりも，直接的な感覚であること，これまでのどの感覚よりも苦しい感覚であること。i. ラスコーリニコフはそのまま署長のところへ行って自首しようとしかける，すると例の彼の体内のスイッチが働いて彼は失神し，その場の危機を逃れる。

署内では疑惑が生じ，そのことは「誰かが黄色い液体の入った黄色いコップを手にして立っている」と表現される。

このようにして彼の精神的状態の循環は，かつて経験したことのない新しい精神世界を彼に与えて，一周を終った。それは元に戻ってきたのではない，これまでより一層深いところにある別の終点に行きついたのだ。彼の犯行が彼にもたらした結果の一つが，初の対人折衝の際に姿を現わした。それは一言にして言うと孤立であり，人々からの絶縁である。

[II-2]

2-3 ラスコーリニコフは盗品を持って外出，これを，「運河へ投げ込むか……いや怪しまれる」と思案したあげく，V通りの材料置場に目を付け，石材の下の窪みに投げこみ，土を掻き寄せ，足で踏みかためた。ここでも，ラスコーリニコフにおいては，思案→決定という実践の仕方よりも実践が先行する。だが，経緯と考え方は別として，事実上これは隠匿に外ならない。厄介払いをした彼を，警察にいたときと同じような歓びが，ほんの束の間捉えた。彼はヒステリックに笑い始め，それからずっと笑いつづけていた。

ラスコーリニコフは自問する――なぜ財布の中を調べないのか，もし今年の事が自覚的な行為であり，単なる愚行でないのだとしたら，もしお前が本当に何か特定の，確固たる目的を持っていたのだとしたら……。その金のために，一切の苦悩を身に負って，卑賤，醜悪，低劣な行為をあえて自覚的に断行したはずなのに……いましがた，水中に投じようとしたではないか［創作ノート参照］。

通常，動機を問うばあいに使用される用語はこの問いの中に揃っている。けれども語り手の答えは，それらの用語を使って行なわれない――ドストエフスキーは言う，「それは彼にとって新しい問題ではなかった。昨夜，水の中に捨てようと決めたときでさえ，反論も，ためらいもせずに，……それ以外に道はないとでもいうように，決めてしまった」と。ラスコーリニコフは分析的では

なく，感情的に考える，「これは，おれがひどい病気だからなんだ。……自分で自分を苦しめて，責めさいなんでおきながら，自分でも何をしているのか分らないのだ。……健康さえ回復すれば……ああ，神様，ほんとうに，こんなことは，もう何もかも厭になった」。

ある新しい感覚がいや応なしに彼を捉え，ほとんど一分ごとに強まっていく。それは……行きあうもの，周囲のものすべてに対する，際限のない，ほとんど肉体的とさえ言える嫌悪感，執拗な，邪悪な，憎悪に満ちた嫌悪感だった。ラズミーヒンのところへ立ち寄るが，「わずか一瞬の間に，今の自分にとって，人と一対一で顔を合せることくらい耐えがたい事はない」という自分の状態を知る。

2-4 ネヴァ河の橋の上から見る光景に，彼は唖にて耳聾なる霊が満ち満ちていると感じる。彼はかつて「この陰気な謎めいた感銘を不思議に思ったが，自分を信頼できぬままに，その謎の解明を先へ先へとのばしてきた。そしていま，彼は突然，この以前に解き得なかった疑問をはっきりと思い出した」。そして……

- かつての過去のすべて
- かつての思想
- かつての課題
- かつてのテーマ
- この全パノラマ
- 彼自身
- 何もかもすべて

— は，どこか深いところ，下の方に，足下の見えるか見えないところに，あるような気がした。

「彼は上へ上へ飛んで行きつつあり，すべてが目の前から消えていくようだった」。ということは，昇天しつつあるラスコーリニコフは，はるか下にある別のラスコーリニコフを眺めているということになる。彼は握らされた銀貨を水中に投げて，回れ右をして家の方へ歩きだした。彼はその瞬間，あたかも自らをすべての人，すべての物から鋏でぶっつりと切り離してしまったような気

がした。

こうしてラスコーリニコフの孤立は進むが，ドストエフスキーがここで言わんとするのは，孤立の方向が自分の意志によって決められたものでないということだろう。警察署においてその開始を感じた孤立は，この礼拝堂の経験を経て，現場再訪［III-6］においてさらに深化する。

イリヤ・ペトローヴィチが主婦を襲撃するという現実夢。ラスコーリニコフは再び失神する。

［III-5］

3-1 ラスコーリニコフは，ラズミーヒンの案内でポルフィーリー・ペトローヴィチを訪れる時，ドゥーニャに熱を上げ始めたラズミーヒンを，突然，からかい始める。彼はむきになって抗弁するラズミーヒンを適宜にあしらい，その反動を利用して，われとわが身に，可笑しくてたまらないという見せかけの活気をつくりだす。これをキッカケに「笑い出したくなるのを必死の努力でこらえているのだという顔を見せながら」，彼は初対面のポルフィーリー・ペトローヴィチのところへ乗り込み，自己紹介する。「心の底からの笑い」という演技は，ラズミーヒンという傍役の巧まない相鎚の自然さが加わって完璧に行なわれる。喜劇的な道化というラスコーリニコフのもう一つの姿が（ここまでの悲劇的な道化に加えて），ここに現われる。けれども，つくられた笑いはつくりもの以上のものではない。居あわせたザミョートフの顔には「困惑ばかりか，何やら不信の色らしいもの」さえ浮かんでいる。

ラスコーリニコフの目的は，敵の手の内を探り出すことにある。それは彼の要求だろう。彼は入質品についての届け出の手続きを，極力さりげなく，質問するという演技を続ける。しかしそれは，被疑者のラスコーリニコフが上手にやればやるほど相手の疑惑を増し，自己の正体を暴露し，かつ滑稽な立場に陥るという性質のものだ。ラスコーリニコフはこの自己防衛のための演技の結果を気にして「これでいいのかな？　自然かな？　大袈裟すぎやしなかったか

な？」と心をおののかせる。「もし母が，あの時計がなくなったと知ったら，絶望におちいるにちがいない。女なんてものは！」というせりふのセンチメンタリズムについてよりも，自分の芝居の拙なさを彼は自責する。「なぜ『女なんてものは！』なんて言ったのか！」

相手が入手した情報が少なく不正確なものであればあるほど，それだけラスコーリニコフは安心である。けれども，そうであればあるほど，相手に対する彼の軽蔑はより大きくなり，その軽蔑を相手に誇示しようとするラスコーリニコフの衝動の現われが，彼の身を危険に導びく。この循環の反復というものが，結局，ラスコーリニコフを事物の論理の終点へと導く。

海千山千のポルフィーリーは落ち着きはらった，冷やかな態度で応答する。彼は中庸の人であるとはいえ，ここではラスコーリニコフの特異な反応に対して，それ相応の応対をしないではいられない。「品物がなくなる心配なぞ決してなかったのです……なにしろ，もうだいぶ前からお越しをお待ちしていたのですから……あなたの品物は二点とも，指輪も時計も，一枚の紙に包んで，あの人（アリョーナ・イヴァーノヴナ）のところ у *ней* にあったのです。……」ラスコーリニコフは，このジョブを「あなたもまあずいぶん注意深い方なんですねえ！……」というぎこちない感嘆によって，辛うじてかわす。彼は懸命になって相手の目を見詰めようと努力し，不器用な薄笑いを浮かべかけたが，いまの受け方の不自然さに気が差して，言わずもがなの補足説明をそれに加える。「僕がいまこんなことを申し上げたのはですね，質を入れた客の数はたぶんよっぽど多かっただろうから……それであなたがそれを全部記憶されるのは大変なことのはずなのにと思ったからです……ところが，あなたは，ひとり残らずそれほどはっきり覚えていらっしゃるし，それに，それに……」。ラスコーリニコフは自分でそれを言いながら，その自分に『愚劣だ！　弱い！　なんだってそんなことを付け加える！』と腹を立てる。第一ラウンドで即興的な奇襲作戦に出たラスコーリニコフを，ポルフィーリー・ペトローヴィチはたちまち見抜いて，逆手をとって彼を精神的動揺に陥れる。

ここに見られるのは，ラスコーリニコフという「地下室男」が，われとわが行動を自制できずにコメディアンの役回りを自ら買って出て，ポルフィーリー・ペトローヴィチの前で自分にも腹立たしいほど拙劣な芝居を打ち，結果として自縄自縛のはめに陥るという，ドストエフスキー一流の悲劇と喜劇が背中合せに張り合せになった構造である。その芝居の後のラスコーリニコフの自問自答は，彼の自意識（自己評価）の見取り図を一枚与えてくれる。

3-2 ラスコーリニコフは自ら敵状視察に乗り込んできながら，相手に主導権を握られたことに苛立ち，自分の現在の立場を確認しようとして，ポルフィーリー・ペトローヴィチが席を外したわずかの間に，要旨次のような長い自問自答をする。

(1). （ラスコーリニコフは）相手の態度の節ぶしに見える尊大さから，自分を被疑者として扱っていることを感じる。「おれの後を犬の群のようにつけまわしている事を，もう隠そうとも思っていない！」 これに対するラスコーリニコフの対応は，独善的な激昂であって，「さっと立ち上って，奴らに向って，真実をことごとくぶちまけてやるか！ おれがあんた方をどれほど軽蔑しているか，その時こそ分るだろうよ！」というやぶれかぶれぶりが見える。

(2). しかし，彼の内部の対極では「もしこれが幻影であり，おれが何もかも思い違いをしているのに過ぎないのに，ただ自分の経験の無さゆえに癇癪を起こし，自分の卑劣な役割（傍点引用者）を持ちこたえられないのだとしたら，どうだろう？ Что, если это мираж, и я во всем ошибаюсь, по неопытности злюсь, подлой роли моей не выдерживаю?」という自己への咎めが持ち上る。ここに現われた「自分の卑劣な役割 подлая роль моя」という言葉は，少なくとも一つの角度から，犯行の動機とのかかわりにおいて，ラスコーリニコフが自身を，意識しかつ自己規定した，あるいはしようとした，キイワードと見なければならない。これと類似の言葉の使用は，ルージンに反対するラスコーリニコフが，ルージンと結婚しようとする妹ドゥーニャに向って，「この結婚は……卑劣だ。僕は卑劣漢であれ，お前はそんなのになってはいけない……

どっちか一人でたくさんだ……僕はたとえ卑劣漢でも，そんな妹はもう妹とは認めないよ。僕か，それとも，ルージンか！……этот брак — подлость. Пусть я подлец, а ты не должна... один кто-ниоудь... а я хоть и подлец, но такую сестру сестрой считать не буду. Или я, или Лужин!」と言うところの，「卑劣漢 подлец」「卑劣さ подлость」「卑劣な подлый」と対応して，犯行の動機への否定的または部分否定的な自己評価を表わす。

(3).「もしかしたら，いまのことは何もかも下心あっての言葉ではないのかも知れないじゃないか？……ああしたことは何時だって言えること，いや，それでも何かがある。」ラスコーリニコフはいくつかの証拠を列挙して考える。a. なぜポルフィーリー・ペトローヴィチは，いきなり「あの人（アリョーナ・イヴァーノヴナ）のところに」という言い方をしたか。b. ザミョートフは，なぜ，おれがずるがしこく話した，などと言ったのか。c. なぜ奴らはあんな調子で喋るのか。d. ポルフィーリーはさっき，なぜおれにまばたきしたのか？　それともあれは，しなかったのか？」

(4). こうしてラスコーリニコフは，「なにもかも幻影なのか，さもなければ，知っているんだ！」という二分法に立つが，後者の方が圧倒的に重い。そこで自分の気休めになりそうな例証をことさらに見付けようとした末に，現場再訪という自分の行なった事実をすら粉飾しようとする。「あの部屋のことは，事実じゃない，熱病なんだ。奴らにどう言えばいいかぐらい分っているさ……」。しかしそれは目下のところ最も心配な関心事であって，「あの部屋の件は知っているんだろうか？　それを知るまでは帰らないぞ！」と考える。

(5). 以上の回路を経て行きつくのは，「なんだっておれはここへ来たのだろう」という問いと，「それにしても，おれがいま苛々しているのは，これはどうも事実らしいぞ」という認識である。こうしたことが何もかも，あたかも稲妻のように彼の頭をよぎった。

以上はいわば表層での探り合いであり，ラスコーリニコフは，最初の警察への出頭以降一貫して取り続けてきた守勢の立場がなおも後退していくのに，歯

止めをかけることができなかった。

次いでラスコーリニコフは，ポルフィーリー・ペトローヴィチが理論問題をめぐって自分の空隙を衝こうとしているのを察知し，この挑戦を受けて立つ決心を即座に固めた。彼は相手が要約した自分の論文の内容を「ほとんど正確に，いや，お望みなら，完全に正確に，お話し下さったのは事実です」と受け合う。こうして，自説を他者が理解してくれたことへの満足感を示すことによって，劣勢を挽回するきっかけをつかもうと図る。それにまた，観念の次元で物を言うことは彼には救いである。その両方から，相手が完全に正確であると同意するのがよい気持だった。

3-3 ラスコーリニコフ理論をやや図式的にまとめると，次のようである。

I a. 僕はこういうことをほのめかしたに過ぎない。非凡な人間は，ある種の障害を踏み越えることを自分の良心に許す権利を持っている。ただしそれは，彼の思想（ときには，全人類を救済するようなものであるかもしれない思想）を実現するために，踏み越えることがどうしても必要とされる場合に限る，と。

b. もしケプラーや，ニュートンの発見が，十人なり百人なりの妨害によって全人類の知るところとなり得ない場合には，ニュートンはそれらの人間を除去する権利を持っていただろうし，いや，そうする義務すらあっただろう。

c. 人類の立法者や指導者，リュクルゴス，ソロン，マホメット，ナポレオンの類は，みな犯罪者に外ならない。これは，かれらが新しい法を与えるという行為自体によって，……古い法を打ち毀した，……そのさい血を流すことも辞さなかった，という一事をもってしても明らかである。

d. 僕の結論は，新しい言葉を発する能力をほんのわずかでも備えている人間はみな，自己の自然つまり本性のおかげで，どうしても犯罪者たらざるを得ない，ということだ。

かれらは，自然すなわち本性のおかげで，常軌にとどまることに，同意することができない。かれらは同意しない義務を負っているとさえ言える。

II 上に述べたことに特に新しいことはない。ただ僕は，次のような自分の根

本的な考えを信じている。すなわち，人間は自然の法則によって，全体として二つの部類に分けられている。

(1). a. 第一の部類は下等の（並の）部類——自分の同類を生殖するという役割を果すだけの，言ってみれば，材料であるに過ぎない部類である。

b. この部類は，生れついての本性から保守的で，正しく，服従の生活を送り，かつまた服従することを好む。なぜなら，それがかれらの使命だからであり，かれらにとって屈辱的なことでは絶対にない。

c. かれら大衆は，法を踏み越えるという第二の部類の権利を認めようとはせず，第二の部類を死刑に，縛り首にする（多かれ少なかれ)。これはまことに正当なことで，かれらはそうして自分たちの保守的な使命を果している。

d. ただし，その同じ大衆が，次の世代になれば，死刑にされた人々を台座の上に祭り上げて，その足元に跪拝するということになる（多かれ少なかれ)。

e. 第一の部類はつねに，現在の支配者である——かれらは世界を維持し，数的に増大させる。

(2). a. これに対比して，第二の部類は本来の人間であり，自分の置かれた環境の中で新しい言葉を発する天分または才能を持っている人間である。

b. 第二の部類はみな法を踏み越える。能力に応じて，破壊者であったり，破壊的な傾向を持つ人間であったりする。こうした人間の犯罪はみなそれぞれに相対的，多種多様であり，かれらのほとんどは，まことに多彩な声明を発表し，より良きものの名において，現在を破壊することを要求する。

c. 必要とされる場合には，彼は自己の内部で，良心に基づいて，血を踏み越える許可を自分自身に与えることができる——といっても，その理念の性質や理念の規模に応じてのこと——その点にはご注意下さい。

d. 第二の部類は，未来の支配者であり，世界を動かし，それを目的へ導く。

e. 第二の部類は，生きているうちに勝利を収めたら，ほとんどの場合，自分の方から処刑を始める。

f. 第二の部類の数。新しいことを語る能力をほんのわずかなりと備えた人間

でさえ，桁外れに少数しか生まれてこない。

いくらかなりと独立自尊的な人間……千人に一人

もうすこし独立自尊的な人間……一万人に一人

もっと独立自尊的な人間……十万人に一人

天才的な人間……数百万人に一人

偉大な天才，人類の完成者……数百万人を数千倍した後に出現

g. しかしこのような人間の出現する特定の法則は，当然，存在しているはずであり，偶然などということは，ありえない。

3-4 ポルフィーリー・ペトローヴィチは，以上のラスコーリニコフの超人論，これに基づく彼のいわば実践論，すなわち彼の理論の生活における適用に質問を集中する。ただし，彼はその前に，ラスコーリニコフの理論というものが，キリスト教神の支配下にあるものか（それとも無神論の域内のものか）どうかを確かめる。ラスコーリニコフはここで，(1). 新しきエルサレムを信じるか，(2). 神を信じているか，(3). ラザロの復活も信じているかという問いに，いずれも信じていると答えて，彼の思想信条がキリスト教の枠内に留まることを告げる。そして，上掲の二つの部類について，両者は完全に同一の生存権を持っている（vive la guere eternelle 永遠の闘い万歳），ただし，新しきエルサレムまで，と。ポルフィーリー・ペトローヴィチが唯一絶対神への信仰をことさらに問うのは，ラスコーリニコフが「偉大な天才，人類の完成者（ただし複数）великие гении, завершители человечества」を最高位に据えたことに疑念を持ったために他ならない。実際のところラスコーリニコフの問題意識には，神を代行あるいは代置する人間を想定する節もある。母親プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナは手紙の文中に「私は内心，最近流行の不信心がお前にも取り憑いているのではないかと心配なのです」[I-3] と書いている。また，ネヴァ河の橋上で，ラスコーリニコフが昇天する幻想を持つところを参照。

ラズミーヒンは初耳のラスコーリニコフ理論から「良心に基づいて血を流す

ことを許しているという一点」を拾い出して，これを「本当に独創的なところ——本当に君一人に属しているところ，「つまりその点に君の論文の基本思想がある」と評する。そしてポルフィーリーと二人で，それは「公(おおやけ)の，法律に基づく流血の許可よりもなおさら恐ろしい……」と唱和する。ラズミーヒンが「……君は夢中になり過ぎるんだ」としてラスコーリニコフの理論（観念）とラスコーリニコフの行為とを分離して考えようとするのと対照的に，ポルフィーリー・ペトローヴィチはこの理論とラスコーリニコフそれ自体を結びつけようとする戦術に熱中する。後者の意図はアリョーナ・イヴァーノヴナ殺しとの連関を引き出そうとするところにあることは，間違いないが，作者ドストエフスキーにとっては，観念と人間の肉体的行為との関連に，光を当てることに興味があったことだろう。これは思想と行動の関係という現代的なテーマである。だが小説のプロットとしては，予審判事は，職業的な観点から，ラスコーリニコフにこのラウンドで初回のダウンの痛撃を舐めさせることが必要である。この二つの問題を手際よく重ね合せること，それは作品の成功にとって必須条件であるとともに，犯行の動機問題にとってもまた要となる点でなければならない。以下にその首尾を見よう。

論点の一つは，二つの部類の混同から誤りが生じる場合，すなわち一方の部類に属する人間が，もう一方の人間だと思いこんで，「あらゆる障害を除去し」始めた場合というのを挙げる。ラスコーリニコフの答は，間違いが起こりうるのは凡人の側からだけであり，そのかなり多くが，自分を先駆者，破壊者と思い込み，「新しい言葉」を口にしようとするが，しかし心配は要らない，かれらは品行方正な連中であって，われとわが身を鞭打つと言うのである。これは，作品の主要なテーマをなす「踏み越え преступление」ということに関して，そのようなエネルギーを有する可能性をドストエフスキーが考えたところの，分離派教徒について言及したものだろう。分離派教徒は，後にミコールカ（ニコールカ）が登場し［IV-6］，ポルフィーリー・ペトローヴィチもこれについて批評する［VI-2］。もう一つの「踏み越え」を意図するグループは西欧思

想の影響から当時のロシヤに出現し始めた社会主義者であり，それについては，ラズミーヒンがこの章で罵倒している。というわけで，論点は歴史的勢力の紹介をするだけになっている。

もう一つポルフィーリー・ペトローヴィチがふっかける議論は，こうである。「……どこやらの男なり若者が，われこそはリュクルゴスなり，マホメットなりとか思いこんで，いきなり障害を除去し始めたとしたら，どうなります？……さあそれで，遠征のための資金の調達にとりかかる……お分りでしょう？」これはもう，先のラスコーリニコフの設問と同じ内容を直接ラスコーリニコフに向けたに過ぎない，ここから後は双方の力技となる。ラスコーリニコフはかえって冷静に戻って応対する。「そういうケースは実際にあるに違いありません。なかでも頭の弱い連中や見栄っぱりな連中は，よくそうした罠にはまり込んでしまうものです。若者の場合は特に」。ラスコーリニコフは相手の質問を行詰まらせるために，相手の訊きたいことをこちらから先に言ってしまう。

3-5 ポルフィーリー・ペトローヴィチは攻撃の鉾先を「その男の良心はどうなるのか」という問題に置き換える。ラスコーリニコフはすでに用意してある答案を朗読するかのように述べる。「そんなことがあなたに何の関係があるんです？……良心のある人間なら，苦しめばいい。もし誤りを悟ったらね。それがその人間に対する罰です――懲役とはまた別の」。

ここへラズミーヒンは口を挟んで，「天才的な人間たち，人を斬り殺す権利を与えられている人間たちは，全然苦しむべきではないのだろう？」と問う。ラスコーリニコフは「突然，物思わしげな顔になり，まるで人に話しているのではないかのような口調で」上の答えに付加して言った。「なぜ，べきなどという言葉を持ち出す。これは許可の問題でも禁止の問題でもない。もし犠牲者をあわれと感じるなら，苦しむがいい……苦悩と苦痛は広い自覚と深い心につねについてまわるものなのだ。真に偉大な人間たちは，この地上にあっては，偉大な悲哀を身にしみて感じなければならない，僕にはそういう気がする」。

ここにはすでに，『踏み越えと罰』という作品の二つの主題の一つに対する

解答がラスコーリニコフの信条という形式で出されている。けれどもその信条は，老婆とリザヴェータの二人を殺害した自己に適用されるならば，苦しむこともなく，悲哀を感じることもない自己は，天才でも偉大でもないという帰結になる。こうして，人間の良心についてのラスコーリニコフの信条を彼自身に当てはめると，彼は天才でも偉大でもないということになる。この信条とは，この場において急に彼が信じるに至ったものではないであろうから，従って，ラスコーリニコフの犯行の時点には，彼の犯罪理論とともに，彼の内に貯えられ，彼の身体と精神に随行したに違いない。しかしこの信条は犯行の際には発動せず，そればかりか，「誤りを悟る」時が来るとすればその時までに，ラスコーリニコフはこの先まだ長い時間をかけなければならない。そして，人間の，このような，内なる個々の理論と理論とのあいだの，信条と信条とのあいだの矛盾は，ラスコーリニコフにおいて特有というわけではない。それは人間に一般である。

ポルフィーリー・ペトローヴィチは，もはや薄手のカーテンをかなぐり捨てて，訊問する。「あなたが，その『並外れの』人間，つまり新しい言葉を語る人間であるとお考えになったことがないなんて，ありえませんよね？」「あなた自身が決心したこともありうるのではないか。……例の障害とやらを踏み越えてやろうと？……まあ，例えば，人を殺して，強奪しようと？」ラスコーリニコフは「もし僕が踏み越えたとしたら，その場合には，勿論，あなたにはお話ししないでしょう」といどみかかるような，傲慢な軽蔑の色を浮かべて，答えた。

これに対する答として，ラスコーリニコフの答は他にどういうレベルがありうるか？　ラスコーリニコフにとってそれは，予審判事との駆引きとか取引きなどという要素とは無関係な，彼の自尊心の，彼の本性の表明でなければならない。それはいわゆる虚勢ではない。けれどもラスコーリニコフはもはやポルフィーリー・ペトローヴィチの質問の網によってからめ取られた。彼は自分の理論によって自分を検証し，自分の仮想を持ちこたえられないことを宣言す

る。「自分がマホメットともナポレオンとも，僕は思っていません……いや，そういった類のどんな人間とも思ってはおりません。そういう人間でないから，僕ならどう振舞うだろうかということについて，満足頂けるようなご説明はいたしかねるのです」。ポルフィーリー・ペトローヴィチはなお追撃をかけて「今日のロシアで，われこそナポレオンなりと思わないような人間がどこにいますか」と，意味の分ったような分らないようなことを言う。ザミョートフはもっと直接に「あれもどこやらの未来のナポレオンじゃないのでしょうか？先週アリョーナ・イヴァーノヴナを斧でたたき殺したのも？」と投槍を投げる。物的証拠の挙がらない攻防戦の緒戦において，ラスコーリニコフはすでに理論上の敗北を喫したのである。けれども，ラスコーリニコフにとって，また人間一般にとって，必ずしも理論上の敗北が彼を精神的にも否定するということにはならない。

［III-6］

3-6 ［III-6］は，ラスコーリニコフが犯行後，第二～三部において経験した意識の渦巻きの集大成である。語り手ドストエフスキーもまた，ラスコーリニコフのかかえる意識の重層の幾つかをここで語る。

疑心暗鬼のラズミーヒンはラスコーリニコフについて歩きながら言う。「……ポルフィーリーのあの口調はかなりおかしかった。とくにあの卑劣漢，ほら，あのザミョートフときたら！……君の言うとおり，奴には何かあったよ――でも，なぜだろう？　なぜなんだろう？」これは，自己の思考と事態との嚙み合いを調整するためであるが，直接に自分の疑念との対決であるよりも，ラスコーリニコフの立場を経由して自己に相対するのである。ラスコーリニコフの方も，ラズミーヒンがそのような姿勢を取り続けて崩さないかぎり，ラズミーヒンに部分的に同化する。「……かれらには事実がないんだ。ただの一つだって――なにもかも幻影なんだ。なにもかも両端のある棍棒，両様に解することのできるものばかりなんだ。陽炎のようにゆらめく観念ばかりなんだ――そ

こで，かれらは厚かましい態度に出て，こちらをまごつかせようとしているのさ。……」 ラズミーヒンもまた彼なりの振子運動をするが，それは本来の自己と彼の祭神ラスコーリニコフのイメージとの間の往復である。ラズミーヒン「僕らはもうはっきりとこの話を始めたんだから（こりゃまことに結構なことだよ，とうとう，はっきり話すようになったのは，僕はうれしいんだ！）。ラスコーリニコフは「やっと気が付きやがったな！」と呟く。

「もし，僕があの事をやったんだとしたら，それはもう必ず，職人も見たし部屋も見たと言うね」 あからさまに嫌悪の色を浮かべながら，ラスコーリニコフはいやいや答え続けた。彼はその理由として「いくらかでも頭の発達した人間や，経験を積んだ人間は，動かしようのない外面的な事実に関しては，なにもかもできるだけ認めてしまおうとするものに決まっているんだ」。これはラスコーリニコフもまた実用主義的な遊戯者の一面を持つことを示す。それは警察事務員ザミョートフとの会話に別の例が与えられる [II-6]。ラスコーリニコフはラズミーヒンに言う，「ずるがしこい人間というものはね，そういう何よりもつまらないところで，いともあっさりとぼろを出してしまうものなんだ。……最高にずるがしこい人間は，最高につまらないことでぼろを出させるにかぎるというわけだ。ポルフィーリーは君が思うほど馬鹿じゃないよ。まるで違う……」。ラスコーリニコフは，いつのまにやら熱弁を振るっている自分に気付いて，われながら奇妙に思う。その奇妙に思ったことから，不意に不安に襲われる。彼はラズミーヒンを振り切るように自室へ飛んで帰り，盗品を始末した痕跡が残っていないか，再確認する。

ラスコーリニコフを心底恐怖に陥れたのはナロードである。「地中から涌いて出たような人間」から面と向って人殺しと糾弾されたラスコーリニコフは，突然，足が恐ろしいほど萎(な)えてしまい，背筋を冷たいものが走り，心臓はあたかも凍りついてしまったかに思われた。力も尽き果てたように自室に戻り，ソファーに横になった彼は，漠としたあれこれの考えの切れはしが，あれこれの情景が，なんの秩序も脈絡もなく浮かんでは消えていった。このあと，仰向け

になったままの彼の頭悩を，もうすこし形のまとまった自問自答的思考のブロックの連鎖が通過する。これらの思考のそれぞれはブロックとしては相互に切り離されたものと言えるかもしれないが，それらの相互関係や相対的位置は分明ではなく，全体としてはいわゆる星雲未分の状態である。中に含まれるブロックはどこに境界を引くかということも難しい。それぞれが激しく渦巻き状の運動を起こしながら，それぞれの内部で，またそれぞれの相互間で，反応を続けている。しかし，これらの意識の全体は，およそ次のような区分を与えて，ブロックに分けることができる。これらは，犯行の前中後に変化をこうむっただろうし，誇張され変形されたものが多いだろうとは言え，ここにおよそ彼の犯行の動機にかかわる自問自答的思考の，一覧表を取り出すことができる。(〈　〉内は本文からの要約。順序は作品の記述のまま。)

〈(1). a.「……あの地中から涌いて出たような人間は誰だ？　あの男はどこにいた，何を見ていた？　何もかも見ていたんだ，それは疑いない。でもあの時，どこに立っていたんだ，どこから見ていたんだ？　なぜ今ごろになって床の下から出てきたのだ？　それに，何だって見ることができたのだ？――そんなことって，ありうるのか？……」

b.「それにニコライがドアの後ろで見付けたケースだが，これも，そんなことって，ありうるのか？」

c.「証拠？　十万分の一ほどのものを見落したら，それがたちまちエジプトのピラミッドほどの証拠になってしまうのだ！　そんなことが，本当に，ありうるのか？」

d.「おれは，それを это，知っていなければならなかった！……どうしておれは，自分を知りながら，自分を予感しながら，斧を手に取って，血だらけになることが，できたのか！　おれは，まえもって，知っていなければならなかった……何を言う！　おれは前もってそれを知っていたではないか！《Я это должен был знать, — думал он с горькою усмешкой, — и как смел я, зная

себя, *предчувствуя* себя, брать топор и кровавиться! Я обязан был заранее знать... Э! да ведь я же заранее и знал!..»」〉

前章 [III-5] でポルフィーリー・ペトローヴィチの前で自己の理論に自分を一致させることができずに痛撃され，この章では彼にとって本来的に最も畏怖すべきナロードから，面と向って「お前が人殺しだ」と糾弾され，窮地に立たされたラスコーリニコフは，自問自答(1).において，彼の意識の基底にある部分を自身に示す。

(1).d.に言う〈それを это〉とは，証拠が漏れる可能性と実際にここで漏れたと考えられていることとを指すだろう。しかし「おれは，まえもって，知っていなければならなかった……何を言う！　おれは前もってそれを知っていたではないか！」と言うときの対象は，証拠に限られるだろうか？　ここは自己の二重性を外から見るラスコーリニコフの目があることを，そしてもともとあることを，示すものだろう。問題はその認識である。意識の意識の問題と言ってもいいかも知れない。知っていながら，関心を向けない（時として全く）というような問題である。これが結局のところドストエフスキーが作品の結尾で示唆する既述の問題である。繰り返すと，「彼は……もしかしたら，自分自身の中にも，自分の信念の中にも，深い虚偽が潜んでいることをすでに予感していたのかも知れないということを，理解することはできなかった」[エピローグ2，また本稿1-13参照]。このあたりにラスコーリニコフの意識の幹線の一つがあるだろうし，いわゆる直接的動機というものを取り出すときに，この，意識上におぼろげながらにせよ浮上してくる認識と，それが埋没したように隠れている状態との，いわば出没意識というものを考えるべきだろう。ただしそのような意識の振幅が何らかのかたちで存在しながら，しかしと言おうか，しかもと言おうか，まったくこれを無視して過ごすこともできるというラスコーリニコフの「特技」を指して，ドストエフスキーは「すでに予感していたのかも知れないということを，理解することはできなかった」と言うのであろう。

〈(2). a. いや，ああいう人間たちは，こんなふうに造られていないんだ。すべてを許されている真の権力者は，ツーロンを壊滅させ，パリで虐殺を行ない，エジプトに大軍を置き忘れ，モスクワ遠征で五十万の人々を浪費し，ヴィルノで急場しのぎにしゃれをとばし，それで，死ねば，銅像が建てられる，——つまり，すべてが許されている。いや，ああいう人間たちは，きっと肉ではなく，ブロンズでできているに違いない！」

b.「ナポレオン，ピラミッド，ワーテルロー——これに対するに，ベッドの下に赤い長持ちをしまいこんだ十四等官未亡人，老いぼれ婆あ，金貸し女——いやはや，いかにポルフィーリー・ペトローヴィチでも，この取り合せは消化しきれまい！……美学が邪魔をする。一体ナポレオンが『老いぼれ婆あ』のベッドの下にはいずりこんだりするものか！……」〉

(2). a. においてラスコーリニコフがナポレオンをブロンズ製の人間と結びつけることは，ナポレオンの銅像からの想像かも知れないが，そのような確立されたもの，従って制度化されたものとして，ナポレオンが彼の目に映るように自らを仕向ける必要が，現時点のラスコーリニコフにはあるだろう。一つにはポルフィーリー・ペトローヴィチの前で理論上の自己の位置を撤回した理由づけが必要であり，もう一つは彼の理論上ナポレオンにおけるような戦略戦術が自分には欠落していることを隠蔽する必要による。

(2). b. において美学が初登場する。その内容が彼の内でどのように，またどれほど体系化され，信じられているかはともかく，ラスコーリニコフの理論と実際上の生活を橋渡しするもの，媒介するものは，この美学という感触の体系でなければならない。そしてその想像上の美学が彼にある種の命令を下して，彼の全行動を律していることは当然に考えられることである。それがあるいは，彼のイデアの主要部分であると言ってよいのかも知れない。

〈(3). 「お婆(ばば)なんぞナンセンス！　あの婆さんは，たぶん，失敗だったが，婆さん自体に問題があるんじゃない！　婆さんは病気だったに過ぎない」«Старуш-

онка вздор! — думал он горячо и порывисто, — старуха, пожалуй что, и ошибка, не в ней и дело! Старуха была только болезнь...»〉

ラスコーリニコフのこのような思考は，あるいは，ポルフィーリー・ペトローヴィチへの理論上の敗北とナロードの威嚇に屈した今の時点に出発したものか，あるいは，老婆殺しの企画の出発と同時に，その進行と平行して，持続してきたものか，それは作品に書いてない。しかし後者であっただろう。つまりアリョーナ・イヴァーノヴナそのものが，ラスコーリニコフ自身の理論の実証にとって，何のかかわりもないという思考は，これまた時とともに彼の意識に姿を現わしただろう。それと同時に，アリョーナ・イヴァーノヴナの貯えた金品を，ラスコーリニコフが彼の目的群の一部を充当するために，奪取しようという衝動は生起しただろう。このことは，ラスコーリニコフにとって，最後まで否定したい衝動であるかもしれない。自他に向ってシラを切り通し，あまつさえ金品を運河に投げ捨てようとさえしかけて，自他を瞞着するのだ。この強奪行為が彼の犯行の主目的であったなどとはとても言うことはできないが，しかし依然として目的であったことは確かである。

〈(4). a.「おれは，ちょっとでも早く踏み越えたかった……おれは，人間を殺したんじゃない，原理を殺したのだ！ я не человека убил, я принцип убил! 原理は殺しはしたが，肝心の踏み越えることは，踏み越えられずに，こちらの側に残ったのだ……おれにできたのは，殺すことだけだ。いや，それができなかった，ということなんだ Только и сумел, что убить. Да и того не сумел, оказывается...」。

b.「原理だと？　ラズミーヒンの馬鹿め，さっきは何だって社会主義者をののしったのだろう？　勤労を愛し，商売のうまい連中で，『全体の幸福』のためにやってるじゃないか……いや，おれには人生は一度与えられるが，それきりもう二度と来ない。『全体の幸福』を待っているなんてことは，おれにはできない。おれだって自分として生きたい，それでなければ生きたくない。何だって

いうのだ！ おれはただ『全体の幸福』を待ち暮しながら，なけなしの一ルーブルを手に握りしめて，餓えた母親のそばを素通りしたくなかっただけだ。『全体の幸福を築くために煉瓦を一つ運んでいる，だから心に安らぎを感じている』，か」。〉

(4). a. はこの時点でのラスコーリニコフの，自己の設問に対する，いわば率直な答えであり，結論と言えるだろう。彼は自己の理論の実践もまたその証明もできなかった。原理を殺すという表現は，はたして，これより以前のラスコーリニコフの自問自答に出てきたものか，それともここが初出なのか，これは分らない。しかしここは，(イ) 原理の否定→踏み越え→新原理の確立（彼の理論による超人主義）という問題と，(ロ) 老婆アリョーナ・イヴァーノヴナ殺害の問題が，確かに結びつけられている唯一の個所である。

しかし(イ)，(ロ)はどういう論理によって，等符号で結びつけられるのか，それは明らかにされていない。ラスコーリニコフの思考の論理が，かの将校・学生の会話を聞いていて，幾通りもある組合せから両者を結びつけた［I-6］。それは金品の強奪をも目的に含んでいたが，思考はそちらへ向かずに，抽象的な壁の乗り越えが彼の前に美しい絵画となって現われたのかも知れない――とは言え，その過程は示されていない。

前項の (3). において老婆そのものの殺害は，原理を殺すという彼の思想の実行ではないということが認識されて，しかもその老婆を殺すことすらできなかった（つまりあの一匹の虱をさえ自分は殺すことができない）という実感は彼を苦しめる。そして老婆は彼の現実夢に登場し，彼が繰り返して斧を振るえば振るうだけ，よりいっそう彼の前に彼への嘲笑的な姿を現わし，哄笑して止まないのである。彼の老婆殺しは，この限りでは，高利貸しから嘲笑されているという強迫観念に端を発するだろう。

(4). b. は前項においてラズミーヒンが代弁したところの，当時の社会主義に対するドストエフスキーの反論である。これに対してラスコーリニコフはいくらか反対の言葉も言っているが，ここでのラスコーリニコフの重点はやはり自

分が生きたいのだという生活，生命への渇望があらわに，むきだしに押し出されていることである。ラスコーリニコフは，観念の衣裳を幾重にも身に纏っていても，その本来の支持体というか基本をなすものは，自分を生きたいと切望している一人の青年である。ただしその青年そのものを，彼の夢や観念と切り離した形で取り出すということは不可能である。ラスコーリニコフが観念と不可分の存在であることに，すべての問題があると言ってよい。

〈(5).「なんだって君たちはおれを抜かしたんだ？　おれは，ただの一回だけ生きているんだ，おれだって生きたい……ああそう，おれは美学的な虱だよ，それ以上ではないさ Эх, эстетическая я вошь, и больше ничего.」。「……その理由は外でもない，a. まず第一にこうしていま，おれは虱だなんて論じているからだ，b. 第二に，この計画は自分一人の欲望や気まぐれを満足させるためにやることじゃない，まことに立派な美しい目的のためだなどと主張し，その証人になって頂こうと至善至高の神を呼び立てて，まるひと月のあいだ，迷惑をお掛けしたからだ。c. 第三に，事を決行するにあたって，あたうるかぎりの正義を守ろうと心掛けて，つまり，重量や尺度，算術を守ろうと心掛けて，あまた数ある虱の中でも飛び切り最高に無益な虱を一匹選び出し，そいつを殺して，自分の第一歩を踏み出すのに必要なだけのものを，正確に，過不足なく奪おうとしたからだ（だから，残りの金は，遺言通り修道院行きってわけ……はは)。d. おれが虱である最後の理由は何かと言えば，このおれ自身が殺された虱よりももっと醜悪で，もっとけがらわしい，そのうえおまけに，殺した後になってそのことを自分で自分に言うだろうと，あらかじめ予感していたということだ。ああ，ほんとうに，このような恐怖と比べられるものが，果して他にあるだろうか！　ああ，この俗悪さ！　この卑劣さ！」〉

この項の冒頭「なんだって君たちはおれを抜かしたんだ？」――これは全編を通じてめずらしくラスコーリニコフが被害者的立場に自分を置いている。「……おれだって生きたい」。ただし彼はそれを社会主義者の理論を非難するた

めの言いがかりのキッカケをつくるために言ったのであるから，それほど力を入れたのではない。

(5). a. ～d. の内容は (1). の詳説である。修道院へ送るべき老婆の供養料から過不足なく奪うという彼の目論見がここにある。さらに，美的虱への自己嫌悪である，ここでラスコーリニコフは，「殺した後になってそのことを自分で自分に言うだろうと，あらかじめ予感していた」ことを最も醜悪だと言う――これは彼の自尊心の確立にとって致命的な損傷であるとともに，彼の美学にとってけがらわしい。すなわち次の項に見えるモハメッドのような命令者とは正反対の姿である。彼の美学はナポレオンやモハメッドのような超人の姿である。

〈(2)′.「おお馬上にまたがり，剣を振りかざして，アラーの神の命令だ，〈震えおののく〉者ども，われに従え，と叫ぶ〈予言者〉の心境を，おれは理解できる。町の大通りに腕っこきの砲兵を並べ立て，罪なき者も罪ある者もそれこそ十把一からげに射ち殺して，なんの釈明の必要があるとうそぶいた〈予言者〉が正しかった。服従せよ，震えおののく小人ども，そして――何も望むな，それはお前らの手当しできることでない！……おお，絶対に，絶対に婆あを許すものか！」〉

〈(6).「母，妹，おれはどんなに愛していたことか！　一体どうしていま二人を憎んでいるのだろう？　たしかに，おれはあの二人を嫌悪している，生理的に嫌悪している，そばにいられると耐えられない……さっきおれは，母に近寄って接吻した，おぼえている……母を抱きしめながら，もし母に知られたらなんて考えると，おれは……いや，それなら，いっそ話してしまうべきか？　おれなら，やりかねない。……あのひとはおれと同じような気性のはずだ」。〉

〈(2)″.「いま，おれは，あの婆あが憎くてたまらない。仮に生き返りでもしたら，きっともう一度殺してやるに違いない」。〉

〈(7). a.「かわいそうなリザヴェータ！　なんだって彼女はあんなところへ戻ってきたのか！　しかし不思議だ，どうしておれは彼女のことをほとんど考えないのだろう，まるで殺さなかったかのように？」

b.「リザヴェータ，ソーニャ！　かわいそうな，おとなしい女たち，おとなしい目をした女たち……いとしい女たち！……なぜあの女たちは泣かないのか？　なぜあの女たちは呻き声をあげないのか？……あの女たちは何もかも人に与えて……おとなしい，静かな目で人を見詰めている……ソーニャ，ソーニャ！　静かなソーニャ！」〉

ラスコーリニコフの意識の渦巻きの行列はやがて現実夢の中へ繰り込んで行き，地中からの男がふたたび出現して，ラスコーリニコフを脅かす。ラスコーリニコフはアリョーナ・イヴァーノヴナにまたも斧を振り降して殺害する。彼女はラスコーリニコフが斧を彼女の脳天めがけて振り下すごとに，ラスコーリニコフに向って哄笑する。その枕元にスヴィドリガイロフが現われ，彼が目を覚ますのを待ち受けている。